



平成29年度 第1回 総合教育会議

会 議 録

八幡市教育委員会

開催日時	平成29年7月11日(火曜日) 午後 3時30分～午後4時50分		
場所	文化センター3階 講習室1		
委員	市長 堀口 文昭 教育長 谷口 正弘 職務代理者 松下 順英	教育委員 布目 有希子 教育委員 橋本 陽生 教育委員 佐野 恵理子	
事務局	教育部長 越本 敏生 教育部次長 川中 尚 教育部次長 西川 茂男	部付次長 佐野 正樹 教育総務課係長 林 左和子 教育総務課 大崎 茂夫	

1. 開 会

- ・市長あいさつ

2. 議 題

- (1) 八幡の子ども達の生活全般について

3. 閉 会



	内 容
[越 本 部 長]	1. 開 会 定刻となりましたので、平成29年度第1回八幡市総合教育会議を開催いたします。それでは、堀口市長からご挨拶をいただきたいと思ひます。
[市 長]	・市長のあいさつ 皆さん、こんにちは。梅雨入り、梅雨明けが分からない真夏日の猛暑が続いている毎日です。今年度第1回総合教育会議を開催させていただきます。 本日も、お忙しい中ご出席いただきまして、ありがとうございます。総合教育会議は、首長と教育委員会が重点的に講ずべき施策等について協議調整を行う場でありまして、両者が教育政策の方向性を共有し、一致して教育行政を進めていくとなっております。
[越 本 部 長]	本日は、私の教育への思いを喋らせていただき、皆様からご意見をいただきたいと思ひます。 今後とも、総合教育会議におきまして、教育現場の課題や問題点について忌憚のないご意見を頂戴してまいりたいと思ひます。 本日も、どうぞよろしくお願ひいたします。
[教 育 長]	ありがとうございます。 それでは、これより議題に入りますので、会議の進行役は、市長にお願いいたします。
[川 中 次 長]	[教 育 長] 本日の議題については、事務局から説明させていただきます。 2. 議 題 (1) 八幡の子ども達的生活全般について お手元の資料をご覧ください。1ページ目は要保護・準要保護就学援助認定率割合の平成12年度からの変遷でございます。 学校ごとの差はございますが、中学校でその変化が大きい状況でございます。小学校では、くすのき小学校、さくら小学校、中学校は、男山第二中学校、男山第三中学校の増加が激しい状況が見られます。男山団地の世帯の経済状況の変化が表れているのではないかと考えております。 2ページ目からは、平成19年度から始まりました全国学力・学習状況調査が、昨年度の28年度で10年が経過しております。始まった当初の19年度と、10年後の28年度の同じ質問について、当てはまる、どちらかといえば当てはまると肯定的な回答をした割合をまとめたものが、この表になります。毎年いくつかの質問事項は変更がありますので、比べられるものすべてを掲載しております。 対象の小学校6年生、中学校3年生に分けて、質問項目の1段目が八幡市、2段目が全国の割合です。全国と八幡市の差を3段目にまた、各学年の横に10年間の割合の変化を掲載しています。 基本的な生活習慣に係る 朝食や、寝起きについては、一定のリズムがついてきていると考えております。特に中学校においてこの10年間でかなり、改善されています。これは、中学校での睡眠など生活習慣に係る指導の成果が出ているのではと考えられます。勉強する時間を決めて実行している割合も国との差も縮まっています。宿題も本市の生徒は一定できていますので、各中学校での宿題をやりきらせる取組が効果を上げていると考えております。しかし、家庭での予習・復習の項目は、国を大きく下回っており、全体としては、自ら予習・復習する自発的な家庭での学習が不足している状況が見られます。 3ページ目では、学校のきまりを守っている、友達との約束を守っている、いじめはどんな理由があってもいけないとも、この10年間で国との差は縮まり、本市の子ども達の規範意識が高まっていることが見られます。また、人が困っているときは進



んで助けますかの質問も同じ傾向を示しています。これらは学習支援員等の配置により、きめ細かく丁寧な関わりができていることにより、子ども達が落ち着いて生活をおこなっていることによるものと考えております。

3 ページ目の後半から、4 ページ目にかけては、国語、算数・数学の教科についての質問となっております。

読書ですが、小学校で国との差が縮まり、10年間の伸びは、国を上回っております。図書館司書の配置により、図書館の整備や充実した読書指導の成果であると考えております。

中学校では、残念ながら反対の結果となっております。これはスマートフォンの普及により、読書離れが起こっているものと考えられます。

5 ページ目から選択式の質問の変化となります。5 ページ目が小学校6年生、6 ページ目が中学校3年生です。本市の子ども達は、小学校、中学校ともテレビやビデオ、テレビゲームやインターネットの時間が多い子どもの割合がかなり高い状況です。

また、中学校ではテレビの視聴時間が4時間以上の割合が減っています。これは、スマートフォンで4時間以上の生徒が4.9%おり、ゲームとスマートフォンによるインターネットに移行したものと考えられます。

小学校では、勉強する時間が多い子供も全国より多くなっています。また、全くしない児童も多く、二極化の傾向が見られます。

中学校では、勉強する時間が極端に少ない状況が見られます。全くしないと答える割合が国と比べて大変高く、大きな課題であると考えております。塾については、通っていない生徒の減少は、男山地区スタディサポートの影響があると思われま。男山地区スタディサポートの中学3年生の定員40名で平成28年の中学3年生623名ですので、ちょうど6.4%です。

以上簡単ですが、説明させていただきました。様々な観点からご協議いただき、子ども達のより良い環境について考えていますので、よろしくお願ひします。

[市長]
[松下委員]

松下委員から順にご意見をどうぞ。

きめ細かな分析の報告を有難うございました。感想になりますが、10年前と比較して生活リズムが少し改善してきたのと規範意識が向上しているように思います。

また、子ども達の生活もこの10年間にスマートになったと思います。この調査のいくつかの設問に対する回答に少し残念な値の部分があると思います。

将来の夢や目標を持っていますかという設問に足して中学3年生の回答値が大きく下回っている値なので気になっています。家での復習する値の低下についても同様に気がかりです。また、国語及び算数の勉強が好きですかという問いに小学校6年より中学校3年の数値が大幅に下がっている事も少し気がかりです。学校の勉強が難しいのか面白くないのかその辺りについては、授業内容をもっと充実する方向で考えなければいけないと感じています。

八幡市全体の学力テストの平均点を全国平均との差が目立ちますが、学校別にみると全国平均を上回っている学校もあります。学校別の色々な課題を整理しながら施策していかなければいけないと感じています。

以上です。

[市長]
[橋本委員]

橋本委員どうぞ。

私が、教育委員になり学校訪問などで直接感じた部分とこのデータを比較し感じたのは、社会の変化に対応して八幡市の施策としてより手厚い支援を施したところが大きく変化しているのではないかと思います。また、教育委員として訪問した時は、既に学校は落ち着いておりました。これは、人員をかなり増やしていただいた事で子ども達が、リズムを取り戻していく事に繋がったと思います。その反面、人的等の支援をしても大きく変化しない部分、教科で言うと国語あたりは、時間がかかると思いま



す。家庭での学習を強化していかないと変化しないと思います。

現代の格差社会・二極化の社会の中で、手厚い保護と学力の底上げを行うなかで、学校の授業時間以外の家庭学習においては改善していない。この家庭学習の部分は、以前からずっと指摘されながら改善出来ないのは、特別なシステムを導入しないと改善出来ないのではないかと感じています。

以上です。

[市長]

佐野委員どうぞ。

[佐野委員]

八幡市の子ども達も時代の流れに沿って変化していると思いました。インターネット・スマートフォンの普及による生活と学習塾の充実が明確化された数字だと思います。八幡市のスタディサポート実施が学習塾の利用数値に表れたのだと思います。この統計の10年間は、経済の安定とインターネット・スマートフォン等の進歩にリンクした統計値なのですが、10年後に同様のアンケートを行えば現行と変わらない結果が見え隠れしています。憶測ですが、家庭内教育の強化が無いと現行と変わらない数値になると思います。

以上です。

[市長]

布目委員どうぞ。

[布目委員]

学習状況調査の小学生・中学生共に10年前より数値は上がっています。特に中学生の数値は上がっており、アンケート内容については、授業が分かりやすい、先生に質問しやすい等、学校に対して好意的な回答の数値が上がっている事から、学校に行きやすい、授業が受けやすい空気になってきていると各校の校長先生からの言葉を耳にする事があり、学校が落ち着いていることになっています。

しかし、学校が落ち着き、授業は受けやすくなり、質問はしやすくなったけれど学力向上に結びついていないと思いました。宿題をやりきる数値は上がっているが、予習や復習の時間は少ないというのは、今まで宿題をやっていない子ども達が宿題をやりきるようになっただけに留まらず、自宅での予習や復習を行わないと学力向上に繋がらないと思います。

今回のアンケートでは、全く家庭学習をしない割合が凄く多いの事にショックを受けました。

以上です。

[市長]

有難うございました。

社会的に見るとマクロ経済政策が原因を言わずに結果を報告している事が問題だと思います。例えば、安倍内閣の20才代から30才代の支持者が多いのは、おそらく就職氷河期を抜け出した年代だと思います。

高橋洋一氏（嘉悦大学教授）が仰っていましたけれど「私の所では、好景気・不景気関係なく東京大学や慶応大学・早稲田大学は、ある程度の採用は有りますよ」と仰っておられます。求人倍率の上昇したのは、この年代の方の層が支持していると言えると思います。格差是正・自殺等が経済政策に寄与していると思います。景気がよくなっている実感は無いが、数値的にはよくなっているというのは、自殺率が下がっているという反パラレルな関係だと思います。これだけでマクロ経済政策を批判できませんが、格差社会については、経済政策の関係を基に論じるべきだと思います。

貧困の連鎖を断ち切るという意味では、長期的な教育投資は、全ての子ども達に平等な教育を受ける事が出来ると思っています。これは、ジェームス・J・ヘックマンの話しに繋がると思います。

学力確保を考えた時に、日本では優秀なハッカーが、何故育たないかという受験勉強だと思います。世界ハッカー大会で3位だった中学生の父親は、一芸がひいでたら良いので、受験勉強をしなくて良いから好きなことに取り組みなさいという方針だったので世界3位入賞できたとおもいます。ところが国はIOT (Internet of things)



と言っています。八幡市は、光通信は各教室にあります但W i F iは、整っていないので今後は、W i F i等のコンテンツの整備を考えています。

資料の1ページ目の就学援助認定率一覧を平均から見ると小学校は4：4で結構厳しいと思います。中学校は、第三中学がほぼ平均だとして2：1の割合で平均を上回っています。これは、教育環境と学力は結果としてパラレルの状況にあると思います。小学校では2極化し中学校は、悪い方向に傾いています。視点を変わると可能性が有るといえますが旧来の学力観から見ると厳しく思います。もう一点は、入学式や卒業式での児童・生徒の歩き方や姿勢が悪いように思います。歩き方や姿勢については、正しく教えた方が良くと思います。

今後、文部科学省が進めようとしているI O T教育について別の視点も必要だと思います。また、家庭での学習（予習・復習）が不可欠だと思います。

谷口教育長どうぞ。

[教 育 長]

この数字については、私としては、家庭の問題とはいえ重い数字だと思っています。学校を通じて子ども達や家庭に様々な指導等を行うにあたり改善等について、次長の方から数字の背景・要因等を説明しましたが、学校も努力していると思いますしそこには、学校支援として人的な配置を行い学校の励みになっていると思います。投資額の兼ね合いもありますが、人的な投資は大きな影響が有ると思います。

市の総合教育会議という事で市のデータを参考にしていますが、学校ごとになると学校間の差がでています。校長会でも話をしますが、市の平均の部分と共に各学校は、各学校の学習状況調査の結果をどう捉えて、子ども達を通じて家庭にどう返すかを考えてもらわないと市全体の話しにはなりませんという話をしています。実際に先程もでていましたが学校の二極化の話も出ていましたが、学校によっては、大きな差があります。各学校はそれをどうとらえるかが、大きな問題だろうと思います。

部として考えている事は、就学前教育に重点を置き、園長会を今年度から幼稚園・保育園合同で行っており、就学前教育についてある程度保育園の園長にお願いする部分も出てきています。教育の経済学の部分を踏まえ予算をどこへ投入すれば効果的かを考えれば就学前教育だと思います。小学校・中学校を助けてもらうためには、保育園、幼稚園、子ども園の先生方に頑張って下さいと常々言っています。

この就学前教育は、大きな課題ですが、もう一つと言えば本市が取り組んでいるeスクール構想、(e f f e c t i v e s c h o o l s) 効果のある学校と呼んでいますが、教育的に厳しい環境のもとにある子ども達の基礎学力の底上げに成功している学校、即ち学力格差を克服している学校を効果のある学校と呼んでいます。そこでの取り組みなどを参考にしながら、大阪大学大学院教授の志水宏吉教授がその様な研究をされています。効果のある学校の特色として、校長のリーダーシップ、教員集団の意思の一致、安全で静かな学習環境、公平で積極的な教員の姿勢、学力測定とその活用等です。また、志水教授の提唱するスクールバス・モデルがあり校長会においても学校経営の一つの方法として重要点が明記されております。気持ちのそろった教職員集団で学校間格差を少なくするようにお願いし、本市教育委員会としての支援を事務局の方でも考えていかないといけないと思っています。

以上です。

[市 長]

私の知人の先生が仰っていたのは、家庭教育が7～8割、学校教育が1割5分ぐらいだと思います。1割5分の中で8割は、適切な指導をすればそれなりにできるようになります。1割から5分の方は、自主的に勉強するそうです。その他は、少し厳しいらしいです。学校の中でのトップとラストは、それほど差は無く。しかし、社会に出ると結果主義なので思っている以上の差が出ます。

[松 下 委 員]

家庭教育の重みなんです但、小中学校の段階で、親がどのようにして子どもに関わるか、また接するかなのですが、今、宿題はしなくてはならないと親子ともにほぼ1



<p>[橋 本 委 員]</p>	<p>00%の意識をもっていますが、しかし、自宅で毎日3～4時間、又は学年×10分の予習復習をどの様にさせているかは、確認できません。各学校が家庭教育等のデータを収集し教員が把握すると共に細かく分析したらいいのではないかなと思います。</p> <p>教えるところから自ら学ぶ、自発的に学ぶところが弱いわけです。宿題は、やらせる・やらされるわけで、教える関係だと思えます。学ぶ関係とは、自分で何を学ぶかを自己選択し、教えられるのではなく取りまわせる時間を確保しシステムを作らなければならないと思います。体験重視といわれるものを例えば土曜日に学習を入れて、自ら選択し学び一定時間自分でこなす。先生に見てもらうのではなく自分で自主点検を行い課題を考える。このような事象の意味を少しでも体験させる方が応用性が広がると考えます。これから、英語教育・道徳教育も入ってきます。全てアクティブラーニング的な主体的、対話的で深い学びに繋がるがキーワードになっているようです。対話的な部分は、子ども一人一人では、力に繋がらないけれど、皆一緒になるとやる気を出したり満足感を感じたりします。この後に繋がる部分が深い学びで教師が後ろから掘り下げて指導する。また、各教科にタブレット端末での教育を導入する事で、子ども達は、自己学習を喜んで進めると思えます。</p> <p>先ほどスマートフォンの課題の話がありましたが、それを逆手にとってタブレット端末にゲームをインストールし色々な課題に取り組める課題を与えればどこまでもめりこんで自主学習ができるのではないのでしょうか。これは、塾で実証済みです。体験型では、MVCキャンプ等もリーダ養成や集団作りの一つの手法だと思えます。</p> <p>思い付きで申し訳ありませんが、旧第四小学校・第五小学校使い方として、合宿所的な教育施設にしたり、教える方から学び方への学校からのマネージメントを含めてIOTじゃありませんが、タブレット端末を導入し子どもたちの実態に合わせた授業の活用法として感じました。</p>
<p>[市 長]</p>	<p>他にご意見等ございますか。無いようなので1点お聞きしますが、全国学力・学習状況調査のデータは、どのように活用されていますか。</p>
<p>[教 育 長]</p>	<p>学校ごとに全国学力・学習状況調査のデータの分析をしていますが、分析結果をどの程度保護者に返せるかですが、懇談会に出席する保護者も少なく全体に返せないのが、学校だよりや学年だよりでポイント等を返すぐらいです。</p>
<p>[市 長]</p>	<p>八幡市の子供たちの状況として、生活全般について意見交換しました。私も学校が落ち着かないといけないといけないと思っています。教育とは、すぐ成果が上がるものでは有りませんが、今後も継続的な取り組みを教育委員の皆様と考えていただきたいと思えます。</p>
	<p>それでは、これをもちまして平成29年度の第1回総合教育会議を閉会します。皆様、有難うございました。</p>